

慈眼寺だより

第2号

平成19年7月
春日井市下市場町

「慈眼寺」

電話 0568・81・6801

☆忘れない努力☆

浜松市 伊藤里己

二十二歳で下市場を離れて四〇年
余、ほとんどの人が知らないこんな
自分が書いても？ と思いつつ、幼
なじみの住職からの電話について返事
をしてしまいました。

当地は二年前に浜松市に合併、こ
の四月に政令市になって「大都市」
の仲間入りです。ですがここ北区細
江町は、浜名湖と三方原台地、赤石
山系に続く小高い山並みに囲まれ、
みかんと茶畑、田んぼが広がる地域
に集落が点在して、1号の「住職雑

感」に書かれている昔の下市場の情
景が当地には各所にあります。長く
ふるさとを離れているほど思いが強
いかもかもしれませんが、記憶は古いほ
ど鮮明に甦ってきます。 今はない
四つ池や、郷中の各所にあった竹藪、
リヤカーのすれ違いにも苦勞した狭
い路など、暗くなるまで駆け回った
古い記憶の引き出しは、さび付いて
いてもちょっと拭いてやれば次々と
引き出しが開いてくれます。中には
忘れようとしても勝手に開くいやな
引き出しもそろそろと。

ところが今では、歳とともに新し

い引き出しほど脆くなっていること
がなんと多いことか。「固有名詞」が
口に出てこなくて「あれが、あれが」
ともどかしく繰り返したり、道で挨
拶されても「どなたでしたでしょう
か？」とも聞けず困ったことが度々。
新しい引き出しを少しでも補完しよ
うと、小まめにメモを取っているつ
もりです。生来の乱筆なため、手帳
のどこに書いたか探すのに手間取っ
ていても、少しでも引き出しの補強
のためと言いつけています。

個人の記憶や記録はこんな他愛も
ない言葉ですみますが、これが集団
や国家となるとやっかいです。五月
に噴出した「消えた年金五千万件」
は、記録がなくなったり、つじつま
が合わないまま放置されていたと言

われているようです。 六〇年前の
戦争責任が未だに曖昧なままだった
り、最近では、従軍慰安婦や沖縄集
団自決に日本軍が関与していないの
では、と言われ始めた問題など、記
録と記憶が混同して議論されたり、
時勢の都合で大きく揺れているので
は。 古くはローマ時代の皇帝の中
に「記録抹殺刑」に処せられ、その
皇帝に関わる肖像・碑文をはじめあ
らゆる記録が処分されたことが、ロ
ーマ史の空白部分の一因だったりと
か。

「歴史は後世が判断」という言葉
で、次代の都合のいいように判断さ
れたり、先延ばしされることがない
ように、記録だけはしっかり残して
ほしいものです。

★寺名「慈眼寺」について☆

ここの寺の名前は「じがんじ」と言われる方がおられますが、正しくは「じげんじ」です。

この名前は「観音経」という

お経の中の、慈眼視衆生（慈し

みの目をもって、すべての生き

物たちを見つめる）という文句

に由来するもので、「慈眼」と

いうのは観音様の目という意

味です。この観音様（観世音菩薩、

観自在菩薩ともいいます）は、世

間の困窮している声を聞き求

め、その救済を自分の修行とし

ている菩薩です。その生き様の

魅力的なことから、シルクロー

ド沿いの国々や日本で大いに

信仰されて、各地に観音堂が立

てられました。大須や浅草の漢

音様、西国三十三霊場や、京都

の三十三間堂などはみなこの

観音信仰に由来するものです。

こんな理由から、寺の名前で

一番多いのは当然「観音寺」、

次に「慈眼寺」ということにな

ります。その次が薬師寺という

名前で、こちらは病気を治して

くれる仏様です。こんな風に各

地のご本尊様たちは、切実なご

利益を期待されていたのです。

曹洞宗は、ご本尊としてお釈

迦様を祀ることになっていま

すが、観音信仰から発生した寺

では昔からの観音様を安置し

ています。

● 因みに春日井市には慈眼寺も観音

寺も二つずつあります。

お盆のお知らせ

① 棚経の日程

八月十二日 浅山、鳥居松

勝川、名古屋方面

八月十三日 四谷、南部

熊野、神領方面

八月十四日 旧下市場郷中

八月十五日 穴橋、関田、上条

高蔵寺、坂下方面

下市場、四谷、南部以外の他所

の方には、寺費の徴収票を兼ねて

戸別にお知らせをしています。が、

来年からは全戸にお知らせする

予定でおります。

② お施餓鬼

お施餓鬼は、毎年八月十八日で

今年は土曜日になります。七月一

日から受付をしております。早い

時間帯は、予約済みになっており

ます。ご希望の方はなるべく早め

にお申し込みください。電話で結

構です。お布施は今までどおり

で、初盆施餓鬼 五万円

特別大施餓鬼 三万円

大施餓鬼 二万円

合同施餓鬼 一万円 です。

③ 精霊流し

お盆のお飾りを従来は、本当に

川に流しておりましたが、環境問

題からいろいろ禁止になり、近年

は八月十五日の午後四時半から

慈眼寺の山門で、檀方総代の方に

お願いして集めてもらっており

ます。まとめて供養のうえ処分し

ております。明るいうちにお持ち

ください。

☆ 遺影の勧め ☆

住職 春日井浩道

慈眼寺本堂の須弥壇に向かって右

側の部屋(上間じょうかんといいます)に先代黙

定和尚の遺影が飾っております。実

によく撮れた写真で、今にも何かし

やべりだしそうに見えます。これは

亡くなる一月前に、プロの写真屋さ

んが取った写真なのです。

先代は、この年(平成八年)お盆前に

悪性リンパ腫という一種の癌にかか

りました。がんセンターで、正月は

越せないという宣告をもらいました。

立場上、立派な遺影をということで

いろいろ探したのですが、ピンボケ

や横向きだったりして、なかなか良

いのは有りませんでした。ちょうど

この頃、彼の運転免許証が切れると

いうので、その心配ばかりしていま

した。暢気な話のようですが氣落ち

することを恐れて病名や余命のこと

は知らせてありませんでした。そこ

で一計を案じ(だましたわけですが)、

それなら免許証を取りに行こうと病

院を抜け出し、写真屋さんに寄って、

しかじかの事情を話し免許の写真と

一緒に遺影も作ってもらいました。

ただ、免許証の写真をそのまま遺影

にするわけにはいきませんから、僧

侶の盛装はもちろん着せ替え作業に

よるものです。この写真を撮ったの

が九月十一日、写真が出来上がりま

したと電話をもらったのが十月十三

日、あまりに立派な写真に仕上がっ

たものでしたから、病院に持ってい

って見せてやりたいと思ったほどで

した。見せてはやりたかったのです

が、その頃は痛み止めのモルヒネの

おかげで、ほとんど昏睡状態だった

ので結局は無理だったのです。彼は

奇しくもその日の深夜に逝去いたし

ました。

このことを経験して感じさせられ

ました。生きているうちは死ぬこと

を予感する動物はいないでしょう。

人間も普段は自分が死ぬことを念頭

に行動することはありません。理性

ではそんなことはありえないのです

が、何しろ生きるといことは、と

りもなおさず死ぬことを考えないこ

となのでしょうか。

遺影は送りに来てくれた皆さんへ

のご挨拶でもあるのです。やはり、

キチンとした姿をお見せしたいもの

です。そこでお元気なうちに遺影を

用意されることをお勧めいたします。

ご本人が入院してしまったら、家族

の方はとても遺影の話など切り出せ

るものではありません。元気なうち

にさりげなく用意するというのも、

なんとなく後ろめたいものです。本

当は、自分で用意するのが一番良い

と思います。皆さんに挨拶する顔を

作るのは自分の責任ではありますま

いか。数年に一度くらいはきちんと

した写真を用意しておきましょう。

それが自分の残された命を見直すこ

ともになると思われます。

暑中お見舞い

申し上げます

檀方総代

伊藤辰男

全右

伊藤正廣

全右

伊藤正

全右

大野和義

全右

大野悟

全右

木村廣孝

住職

春日井浩道

☆ 梅花講たより ☆



この写真は、今年六月八日第二
○回尾北梅花流奉詠研修会に、登壇した時のものです。慈眼寺梅花講十五名で「太祖常済大師瑩山禅師入寂御和讃」をお唱えしました。

「情感が、こもっていて、とても良いお唱えです」と講評を頂き喜んでおります。このような大会（発表会）に年三回位出場します。緊張しますがとても良い経験になると思います。

梅花講は、その他慈眼寺の行事（大般若、涅槃会、灌仏会）の時等に奉詠しています。

普段の練習は、三組に別れて練習しています。

一組は、ゆっくり・ゆったりと練習する組です。ほとんどの方が、二〇年以上続けてみえた方です。二組は、もっともっと上手くなるうという意欲のある組で、練習も一生懸命です。三組は、始めて五年未満の方達で、色々な曲を練習

しています。

○梅花講員を募集しています
日常とは一寸違った曲、詠讃歌に親しんでみませんか？ 月曜日の夜七時～九時まで、二時間、五人で練習をしています。楽しいお仲間に参加しませんか。

☆ 下市場墓地の管理について ☆

慈眼寺門前の下市場墓地については、墓地管理委員会が管理しています。通路や水場など公共のスペースについては清掃、草取りなどしますが、個人の区画内については、使用権者の方で草取りなどをお願いします。お盆や年末などでも、一部には草ぼうぼうという

区画がありましてみんな困っています。金さえ払えば勝手というところでは皆さんの迷惑になります。ご協力をお願いします。

なお、墓地が不要になって返却を希望される方には、現在でしたら申込金がお返しできますのでご相談ください。

☆ あとがき ☆

わずか年二回の発行でも音を上げています。作家というのはいったいどんな人種だろうかと・・・
今回は、趣向を変えて浜松の伊藤里己氏に原稿をお願いしました。ありがとうございました。

「慈眼寺だより」 第2号

平成19年7月15日発行
ホームページ ↓

<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/>